

名古屋大学工学部 正員 河上省吾
アドパース 正員 ○鈴木紀夫
日本住宅公団 正員 遠山正美
" 正員 渡辺 博

1. はじめに

本研究は、大都市周辺部で開発されている住宅団地における交通問題を実態調査によって明らかにし、住宅団地開発において交通計画に留意すべき事項を明らかにすることを目的とするものである。

調査対象地域としては、名古屋駅の北西及び南東に各々20kmの所に位置する日本住宅公団の開発した江南、豊明の2団地及びその周辺部を選んだ。両団地の計画概要は表-1の通りである。

表-1. 団地の概要

	江南団地	豊明団地
市人口(A)	89,795人	44,481人
団地人口(B)	12,641	7,721
B/A%	14.1%	17.4%
開発方式	一団地の住宅経営	土地改良区管理事業
入居	開始 昭和43年11月 完了 " 47" 6月	昭和46年8月 " 47" 12月
敷地面積(C)	292,274 M ²	182,177 M ²
建築面積(D)	33,015	27,208
建築面積率(E)	165.07%	125.66%
%	11.3%	14.9%
%	56.5	69.0
団地内の施設	中学校1校、小学校1校、児童遊園、幼稚園、診療所、派出所、幼稚園、遊園地。	左記の外に中央部に公民館、中央公園あり。

2. 交通実態調査

2-1 調査の内容 調査対象住戸は両団地とも

に12.5%で抽出し団地周辺部からも各々50戸づつを抽出し、以下の諸項から成るアンケート調査を家庭訪問法で実施した。すなわち、(世帯の属性を尋ねる)世帯票、(個人の属性を尋ねる)個人票-1、(パーソントリップ調査を行なう)個人票-2、及び(子供の遊び場及び経路を尋ねるための)団地地図を配布し、回答を依頼し、後日回収して集計を行った。なお、調査票の回収世帯数は753で、平均回収率は80%であった。

3. 調査結果の分析および考察

3-1. 個人および世帯属性 団地およびその周辺の住民の個人、世帯の諸属性を明らかにするために、家族数、年齢別人数、職業の種類、職場での地位、学校の種類、運転免許の有無、世帯および個人収入、自動車および自転車の有無、駐車場、居住年度、住宅の種類、住居の広さなどについて調査集計した。これらの結果によれば、両団地ともに家族数、年齢構成についてはほぼ等しく、ほとんどが核家族である。自動車の世帯保有率は江南、豊明それぞれ60%、70%である。こうした種々の要因における差異は団地間の差異よりも団地内外の方が大きい傾向にある。殊に職種、職場での地位、年収については団地内外の差異が大きい。

図-1. 通勤通学の所要時間

地区別通勤所要時間分布

地区別通学所要時間分布

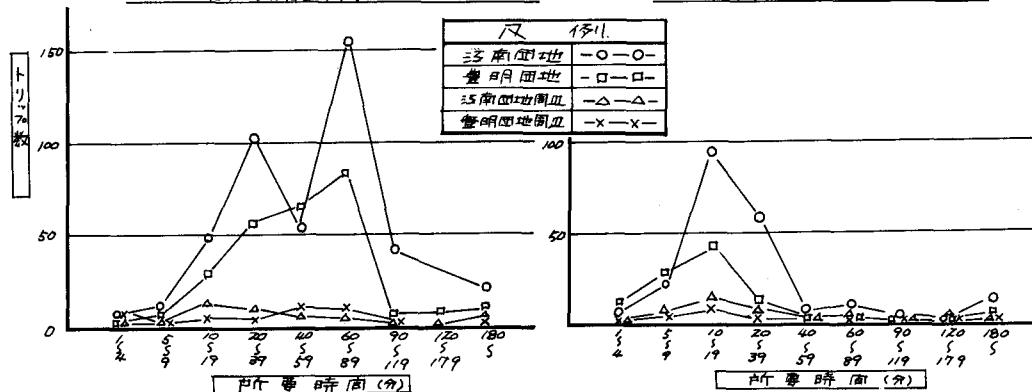
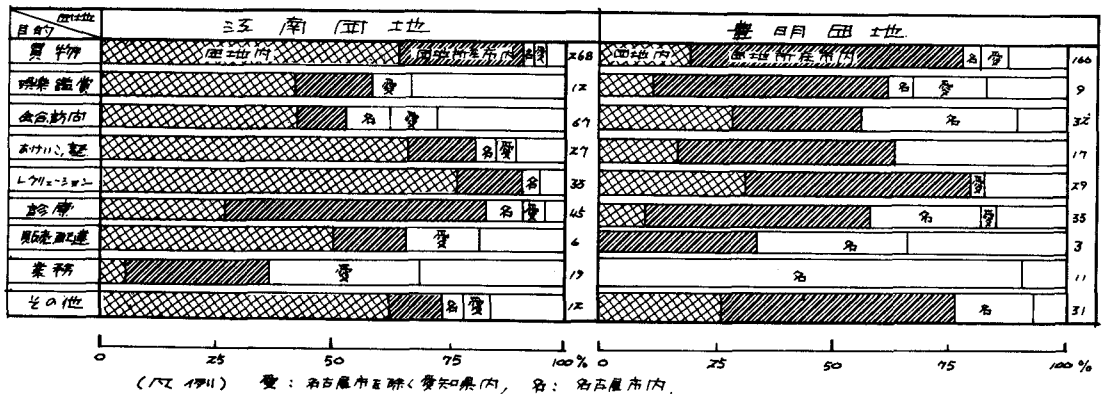


図-2 目的別トリップの到着地



3-2. 通勤の所要時間分布及びOD調査(図-1) 所要時間の分布について江南ではそのピークが2つに分かれるという現象がみられる。これは通勤先が遠近2ヶ所に分かれているためである。このことはOD調査と合わせ考えれば明らかである。これによれば江南団地においては、尾西地方への流出トリップは通勤総トリップの24.1%であり、名古屋市へのそれは42.3%である。一方豊明地区では名古屋市が大半の58.6%を占め、他に西三河地区が16.2%を占めている。

3-3. 時刻別トリップ発生数 住民の各時刻毎の発生トリップ数を見ると、午前7時前後と正午前後及び午後3時頃にピークがあり、前者は団地からの流出トリップで、後2者は団地内での買物のためのトリップと考えられる。

3-4. トリップの団地内での完結度 目的別のトリップの団地内の完結度について調べた結果が図-2である。これに依ると団地内でのトリップの完結度は江南の方が高い傾向にある。すなわち、団地の機能として自給性が高いことを示しているといえよう。

3-5. 生成原単位 各種属性毎に地区別に生成原単位を求めてみたが、各属性および地区別との相関性はあまりは、まじりしたものは見られない。

3-6. 両団地の特性評価 以上の諸事項から両団地の性格を概括的に整理すると表-2のようになる。

4. 団地内の子供の遊び場の調査分析

団地内に設置された遊び場が現実にとのように子供たちに利用されているかを子供の年齢別、性別に調べた。さらに各種遊戯施設の誘致距離の分布を調査した。また、遊び場までの経路の街路による分断率でもって遊び場のブロック完結度を示したものが表-3である。以上の結果から年齢が増すほどプレイロットから児童公園へ、さらに近隣公園へとその活動圏が広がっている。分断率については4~5歳で十数%が小学校へ3年生で30~40%となる。また、男子は女子に比してこの比率は高い。このことを考えれば団地内の遊戯施設は必ずしも機械的な均等配置でなくとも良いと思われる。すなわち、それだけの魅力のある場所であれば、少し遠くても行くのである。遊び場に関しては以上のような定量的な把握のみならず、遊びの本質が本来認知的で創造的であるべきことも考えた時、現今のやや機械的とも思われる計画的な設置方式を再考する余地があるように思われる。

表-3 遊び場へのトリップの経路による分断率

	江南団地			豊明団地		
	分断率	総トリップ	分断率	分断率	総トリップ	分断率
4~5歳	37	301	12.3%	16	115	13.9%
小学校 男	27	88	30.7	20	48	41.7
1~3年 女	10	55	18.2	4	17	23.5
合計	74	444	16.7	40	180	22.2